

# アトリエ通信

号数  
第3号

発行日  
昭和62年6月27日

発行場所  
釧教大絵画研究室

## 雑感

新井 義史

62年も4月を迎え、このアトリエ通信も創刊一周年となり、第三号をお送りするに至りました。

本年も3月に渡辺・菅谷の両名を送り出しさらに、4月には新たに2名の新アトリエ生を迎えました。

美術科新入生の方では、今年のムチャクチャな新入試制度のドサクサに紛れて？4名の中学専攻、1名の小学校課程の学生の所属が決まりました。昨年は計6名で、今年が5名ですから、5年後には美術科入学者は0人になる計算です。

錦谷先生が退官し、デザインの教官は今年一年は補充のあてが無く、私がデザインの学生の面倒も見ることになりました。そこには4年目にして、語学を5本残している某男子学生の成田君という、つわものがあります。

彼は昨年1年間、錦谷先生から逃げ回ることのみ専念したために、おかげで一般の授業も含めて、1年生よりも過密なスケジュールを組むはめとなりました。彼が何本語学を取れるか、はたまた卒業は可能かと、美術科を挙げてのトトカルチョが行われています。

アトリエの近況について触れますと、恒例の卒業記念として、今年は両名が大奮発して立派なラジカセを寄贈してくれました。

<sup>2P</sup>  
<sup>12/9</sup>音響設備の充実以外では、スチールの書棚が2本、ホワイト・ブラックボード、が新規に購入され、学習環境が整備されました。

これを機に、無残な結果であったパーキング方式を断念し、三たびアトリエの配置換えをおこないました。（配置換えは私の趣味ですから）今回こそは、おそらく究極の配置となることを期待しております。

さらに、デザインの実習室も、デッサン室も配置換えしたために、雰囲気が一変した感があります。制作の方も良い方向に向かってくれればと思うのですが……。

このついでに報告しておきますと、アノ金工実習室も今月一杯を「片付け月間」と銘打ちまして、大整理計画が進行しつつあります。もちろん加藤先生が自主的に発案する訳は無く、実は、消防署の検査の折りに、この状態は「危険である」との指摘を受けたことによるものです。

ところで、こうした環境面での変化以外に、美術科のカリキュラムが大きく改編されたことも、今年の特徴であると言えるでしょう改定のポイントとしては、

### ①美術科教育関係の授業の増加、

1年後期と3年前期に美教演習が2本加わり、これまでの美教育法を含めて1年から3年まで継続履修となる。

(3年前期の演習は附中の川上先生)

- ②他コースのAの2科目履修の1科目化負担を軽減して、自コース及び自主制作の充実を計った。
- ③各コースにDを新設し、卒業制作・論文指導の時間とした。
- ④デザインに偏っていた非常勤の授業を各コースに分散させた。

リトグラフ = 札幌大谷短大の岡部氏  
木彫 = 道都大学の上田氏  
美教演習 = 上記の川上氏

5年程前の卒業生から見れば、現在の学生の修得単位数は、おそらく驚く程軽減されていることとなります。しかし、教育活動というものに完成は有り得ないわけですから、状況に対応した改編は今後も続けられることと思います。

ともかく、今、美術科は新たな地平に向かって変化しつつあります。

さて、毎回好評の新製品コーナーです。今回はストーブです。

子供が生まれたことから、これまでのように夜中は消して朝、目が覚めた頃の氷点下の室温も我慢する、というわけにもいけなくなりました。いろいろ検討した結果、ノルウェーのヨツール社製のコークスストーブを買いました。

約14畳を暖めるために、真冬は一袋1200円

のコークスを2日で使ってしまいますから、石油がダブついている現在は、むしろ高くつくのかも知れません。しかし、熱の伝わり方というものは不思議なもので、固形燃料の場合は、天井が暖まらずに床付近が暖かくなります。また、一度点けたら昼夜を通じて焚きっぱなしですので、今年は寒さ知らずでした。

今、私はヨメさんに逃げられて一人暮らしが続いていますが(あと一週間程で帰って来ますが)夜、帰宅しても家中が暖かいということはきわめてありがたく思えます。(4月に入ってからは一袋が6日持つようになりました。)

もう何も買わずに貯蓄に励もうと決意しても、そんなこんなので、なかなか貯りません。ぜひ、次回はこのコーナーで紹介するものが無いよう儉約にところがけたいと思います。

ところで、前回の編集後期で5名の卒業生に記事を依頼しましたが、便りがあったのは実に2名でした。コラッ、小林・内山・川守田の横着者!!

神君と秋山君は期待に応えて、しっかりと昨年うちに原稿を送ってくれました。それぞれがいろいろな問題に直面しつつも真剣に取り組んでいることがうかがえ、貴重な文章であると思います。今後は毎号ひとつはこうした卒業生からの状況報告を記載することができればと考えます。 62.4.23

## 特集 1 卒業生からの便り

神 史 明

拝啓、アトリエ通信第2号、楽しく読ませていただきました。写生旅行の記事を読んで、おもわずニヤついてしまいました。「現在の生活から」ということで原稿依頼がありましたので、率直に書かせてもらいます。

現在勤めている学校は、学級数9学級、特学1の中学校であります。美術はもちろんですが、なんと1年男子の体育も教えております。(昨年までは2年の理科だった)昨年、はじめて卒業生をだし、今は2年生を担当してます。子供たちと接することは楽しいですが、反面疲労度は大きいです。現在マスコミで、騒がれているような中学生に対する報道は、ここ田舎の学校でも例外ではありません。私自身は、経験してませんが、昨年、自分の学級で他の先生に対する嫌がらせがあって、大変苦労しました。進路の問題もあって、毎日がその子供たちの家庭訪問の連続でした。全員がそれぞれの道へ進むことができたのが、私のすくいでした。

今、私んところでは新卒の先生が苦労してます。授業がなりたないというのは、先生にとっては深刻なことなのです。生徒との信頼関係の強弱によって差があるみたいです。これから教職をめざされる研究室のみなさんは、よっぽどの覚悟をするか、学校を選ぶ(実質はむり)かしなければ大変だとおもいます。

担任を持つ前は、絵をかく余裕は少しはあったのですが、最近は全然だめです。前号の先生の「毎年1000号突破」まではいきませんが、私もノルマをたてています。「200号・銅板10枚」その実態はといいますと、昨年は90号・5枚という、目標の半分にも至りませんでした。数は少なくとも中身が良ければ…、残念ながらそうじゃないのがなさないかぎりです。

その代わりといっちはなんですが、レコードと本の数だけは増えました。それからフライ・フィッシング。たらんぼ、ぼりぼり、ニジマス等おいしいものもいっぱいあります。

戦場の先生がだも、おもしろい人がたくさんいます。特に私が所属している2年団には傑作な人がそろっています。例をあげると、T先生。彼は、もう50才になるのですが、札幌からの汽車での帰りに、汽車の中で途中で寝てしまい、目がさめるとそこは浦幌を通りすぎた後。上厚内であわてて、反対車線に止まっていたコンテナ車にとびのった。浦幌側に動きだしてほっとひといき。浦幌駅が近づいて、列車が減速してきた。「やれやれ、これで家へ帰れる」ところがどっこい、この列車、駅

の構内に入っても止まらない。「そんな…」結局、T先生はあの10月下旬の寒い夜中、札内駅まで逆戻り。この話を2学年の朝の打合せの時笑いながら、「事故報告」といって話すんです。いや～本当におかしかった。

そんなわけで、教員という仕事は一言でいうと、「苦しい中にも楽しさあり」っていうところかな？ いずれにしても、自分は職場にめぐまれたと思っています。

ナチスの宣伝相をつとめたゲッペルスは、ヒンデミッド事件でのフルトヴェングラーへの反論で、「政治は、今世紀最大の芸術である。」といいましたが、そのような基準で考えると、「教育もまた芸術」なのかもしれません。

前号に「人生観」のことが書かれていましたが、田淵義雄著「森からの手紙」におもしろいことがでてました。それは、人生は夢の錬金術だということです。ちょっとだけ引用させていただきます。

あなたは、どんな暮らしを夢んでいますか。自分の夢をもっともっと大きく脹らまそう。それからその夢をゆっくりゆっくり煮つめて、夢のエッセンスを抽出するんだ。そして、その夢のエッセンスをよくこねてから、自分の好きなカタチに作り上げるのだ。人生とは、夢という心のエネルギーを燃やしながらか、その夢を実際のカタチにしていく錬金術なのだと思う。

種村季弘は、「錬金術もしくは錬金術的思考は、問題を金属変成に局限しないならば、今日でもりっぱにアクチュアルな哲学である」から、人生は哲学ということになるんだろうなあ。

ながながとくだらないことを書いてしまいました。このへんで終わることにします。次号のアトリエ通信楽しみにしています。

昭和61年11月25日

神 史明

自分は今、田舎の小学校の先生をしています。美術に関する文化にはとても、ほど遠い生活環境です。こどもたちも、おそらく図書室の本と、時々学校に出回っている本ぐらいでしか、世の中にでまわっている絵画に接していないように感じられます。

自分は先月、せめて自分が担任している間に、一枚だけは時間をかけ、指導している自分も納得がいく作品を描かせようと試みました。モチーフはドライフラワーと唐津焼の花瓶、そしてカボチャと数個のミカンです。写実的に小学4年生に描かせたのです。

計20時間くらい費やした結果、作品は出来上がりました。そして、地区のコンクールに出品しました。その結果、自分の描かせたものより、デッサン力やぬり方など劣っているものが選ばれていく光景を、みせられました。つらかった。一言「大人の絵だな。」と評されたのです。

おそらく、アトリエの後輩のみんなには想像がつかないと思います。この結果から自分が学んだことは、「子どもの絵」というものでした。納得がいかず県の審査にも参加させてもらいましたが、やはり、審査の視点は「子どもの絵」という視点なのです。その児童の年齢における絵なのです。

自分は在学中から絵かきになりたかったわけではありません。好きな絵を納得がいくまでかくことができればいいと、そして、教師になり子どもに（簡単に言えば）絵をかけるように教えることができる力をもっていました。でも、今、盲点に気づいたのです。

「子どもの絵」とは、ということです。

アトリエの中には教師になる人もいるかも

しれません。附小・附中はもとより、一度子どもの絵に触れてみて下さい。いい勉強になると思います。それから、美術や図工の先生というのは絵が上手なだけではないということです。ねん土でものをつくれなければならない。木や箱でいろいろなものを生みだせなければならない。そして、制作を、その過程を子どもといっしょに楽しまねばならないということです。何か、新米教師二年目が、と思われそうですが、そう思います。

## L I F E

自分は、生きています。同封した写真、一枚は学校の担任している子どもたちを教室の前で、やはり、子どもの笑顔は良いなと思います。時々といっても今年3回目ですが、山に登っています。また、子どもと一緒に釣りに行っています。もちろん晩のおかずのために。

先日、中島みゆきの「36.5° C」LPを買いました。彼女も徐々にかわっているなと思います。夏休みに参上した時、新井先生はミドリちゃんをメンコしていましたが、今はよりいっそうこぼんのうになっているのではないのでしょうか。アトリエのみなさん、新井先生のどくぜつに負けず、頑張れよ。新井先生や加藤先生の影響をもろにうけている自分に出くわすたびに、釧路がとてものつかしい。

( 61.12. 6着 )



特集 2  
今年に懸ける！ —— 私の一言 ——

編集：室長＝大橋

とうとう62年度が始まってしまい、今年のアトリエはどのように成長していくのか考えてみた。

やはり一人一人学年上になったということで各自の思い入れも力が入っているようである。

3Fの美術棟はもはや新井先生の天下となり、アトリエの配置換えを行い（教官室とも）、今年最良の制作スペースが生まれたのではないかと私ともども考えています。（これもひとえに新井先生の手密な配置計画のおかげです。）渡辺先輩・菅谷先輩のおかげで高音の出るラジカセも入り、きっと制作にも身が入るでしょう。そこで、アトリエ生各自に今年の意気込みなどを聞いてみました。

宗森： いよいよ4年目になってしまった。絵を描く事が自分にとってどういう意味をもつか分かりはじめた……気がする。?! この一年でそのことを確実に実践して行きたいと思う。

篠塚： いきごむ!!<sup>1)</sup>

河村： 我が道をゆく!!<sup>2)</sup>

松久： 日々の生活を大切に、漠然とした制作義務に対するメランコリア意識を脱却し、制作権利としてやりたいことをする。おひとよしの馬鹿者は自己破壊につながる。これから何をするかは言わない方がいい。いろはにほへとちりぬるをときたものである。<sup>3)</sup>

大橋： 学生生活の後半を迎え、これまでの生活パターンを一新すべく気を引き締め、精神鍛練、基礎を固めたい。

伊藤： 早朝制作を行って多くの作品をつくりたい。

藤井： 今年は絵画の基礎をつくろう。<sup>4)</sup>

中塚： 消息がつかめないので（去年から）とにかく大学にきてもらいたい。（大橋）<sup>5)</sup>

以上のように、アライズムの吹き荒れる中アトリエ生は着々と力をつけていくでしょう

(註)

室長の〇君に、「今年に懸ける意気込み」というテーマで記事を頼んだところ、上記の様な情けなくもはかない一文が寄せられました。

特に、1)、2)のわずか4～6文字で簡単に言い切ってしまう、その大胆さには驚かされます。精神の空洞化ぶりが表わされている。

3)は、逆にゴチャゴチャ書いてあるものの、話がピーマン。

4)、5)の両名は、本年期待のアトリエ新2年生。4)君は又の名をオトボケノフジイと言ひ、周囲の人間と彼との間には時空間的にズレがある。5)君はその姿を見ることが極めて難しいことから、別名マボロシノナカツカ、学名を7単位ノナカツカと言う。

以上のように、アトリエは今年も大変期待されるメンバーが勢揃いしました……………??? (新井)

- 10月17日 デザイン4年のおおぼけ3人組(田中・和田・鶴沼)が田中の免許取得記念ドライブ中ハンドルを切りそこねて正面衝突! 田中・和田両君は10日間の入院、鶴沼君は無傷。ちなみに、車は無保健の借りもの。
- 11月 本年度の道の教員採用試験結果出る。中学校は良好、小学校は全滅。田中(テ)=A採用、渡辺(絵)・阿地(彫)=B採用、卒業生判明分 山中(絵)・川守田=B採用、千葉県の採用試験結果は、田中・渡辺・菅谷の3名が合格
- 1月13日 錦谷先生退官記念会行われる。(於、パシフィックホテル) 卒業生約80名が集まる。
- 2月10日 追いコン(於、郵政会館)
- 3月5日 入試 中学美術受験者は24名。
- 3月23日 卒業式 めでたく全員卒業
- 3月31日 錦谷先生退官 4月から「北海道栄養短期大学教授」(札幌) あの年にして単身赴任に。
- 4月1日 加藤・新井、両先生助教授に昇任。
- 4月10日 美術科新入生決まる。中学課程4名、小学課程1名。出身は釧路3名、小樽、青森各1名

本年度卒業生のゆくえ

- 鶴沼(テ) 山形県のデザイン事務所に就職
- 菅谷(絵) 千葉には行かず、埋蔵文化財センター(釧路市立博物館内)でアルバイト
- 田中(テ) 札幌にも千葉にも行かず、根室の中学校に赴任。
- 和田(テ) 札幌市で臨教。
- 渡辺(絵) 美幌中学(出身校)に赴任
- 鎌田(美) 滝上町で臨教。
- 阿地(彫) 6月づけて、留萌の小平中に赴任。

□過年度卒業生のゆくえ

- 中谷内 根室を脱出し、白糠中学校に転任
- 桂(テ) 釧路養護学校に赴任
- 川守田 旭川あたりの盲学校に赴任
- 山中 美原中に赴任

□卒業生の結婚情報 (今年は結婚ラッシュです!)

- 葛西(美) 3月28日 チイちゃんと。(葛西君は昨年より釧路東中に勤務)
- 保東(金) 6月に ヨシミちゃんと。(滝川で挙式)
- 深田(テ) 6月に と。(養成邑勤務・新住所は彼女の実家)
- 加藤(金) 7月予定が早まり入籍済み。(養成邑勤務、勤務先での出会いとか)

## 写生旅行報告

62. 5. 12 ~ 16 場所：小樽

本年度の資料採集調査旅行が、上記のように実施されました。小樽は今回新開拓の地、そして運河改修後の状況は誰も見ていないこともあり、多少の不安感の中での実施でした。

本隊の7名は、12日夜の「まりも」にてほとんど貸し切りのゆったりした列車で向かいました。それに剣道部の試合後札幌に居残り、一泊400円の木賃宿に泊まって「出稼ぎの心得」なるパンフレットを頂戴してきた宗森君と、13日の特急で向かった私とが「港湾労働者福祉センター」にて合流しました。

12日は毎年恒例の「雨」に恵まれましたが、誰も残念がる者もなく、当然のこのように受けとめ、市内探索に費やされました。

天候の面から言えば、12日を除けばなかなかの好天で、3月に卒業したどちらかが雨男(女)であったことが実証されました。

さて、注目の「運河」は見事に改修され、おしゃれな街路燈付きの立派な石組の遊歩道が出来上がっております。西欧に遊んだことのある私はいづいブリュージュの運河を連想してしまう程でした。

2日めは運河中心、3日めは高台にある小樽公園から市街と港を見下ろしての制作でした。満開の桜の花の下、久し振りに浴びる強い太陽の光の中で気持ちの良いスケッチを行うことができました。

今年は、これまでのように油絵に限定せず、水彩でも可としたために(ただし、水彩の者は後に油絵に描き直して1枚提出)、油彩で描いた者は半数程でした。しかし結果から見ると、水彩で描くこともなかなか勉強になると思われました。

写生時間が実質的に2日間と短かかったた

ありますが、これまでのように、後半にダレきって「もういやだ」「帰りたい」と言うような雰囲気ではなく、もう一日ぐらいスケッチしたいという建設的な姿勢が伺えたことは収穫でした。

ところで、アフター・スキーならぬアフター・スケッチの面に触れてみますと、2年の「おとぼけの藤井」は周りが目を離すと「すぐ寝てしまう」という実態が明らかにされ、以来ニックネームが「3年寝太郎」と改称されました。

同じく2年の「まぼろしの中塚」は、この写生旅行で初めて姿を現したものの、目を離すとすぐ「パチンコ屋」に入ってしまうことが解りました。しかも彼は、密かに「紙マージャン」買い込み彼のこの一年間の学習の成果を披露してくれました。

夜のトランプ合戦では、4年の河村さんが優雅に指の爪を伸ばしていたために、ぶたのシッポでは流血の参事となり多数の被害者が出ました。

食事の面では、「ラーメン大王」の件に触れない訳にはいきません。驚異的な量で知られるこの店で、宗森君は約3杯分入りのすりばちに入った「ジャンボ」に挑戦しました。マスターの笛の合図で30分以内で食べ終われば、認定証がもらえるとのふれこみですが、健闘むなしく見事にギブ・アップし笑い袋に笑われました。彼は宿に戻ってしばらくの間、腹痛を訴えていましたが、しっかり酒は飲みました。また、北一ガラスでは制作現場も見ることが出来、皆のんびりと小樽のムードを味わうことができました。

総合的な評価では、一昨年の函館に次ぐ内容を持った写生地であるといえます。来年の場所はまだ未定ですが、卒業生の中でおすすめのコースがありましたら、是非紹介してもらえたらと思います。

62. 6. 2 新井記

### 編集後記

おまたせしました。第三号をおとどけします。発行が予定より大幅に遅れ、「アトリエ通信、早や挫折か」と思われた方も多いのではないかと思います。ポチポチと続けていきたいと考えています。

なお、今回は記事が多くていろいろと詰め込みましたので、多少レイアウトに難がありますがご了承下さい。

次号は12月発行を予定しております。今回記事を未送付の卒業生(小林、内山、川守田)は必ずお願いします。また、住所変更等あった人も早めにお知らせ下さい。